

令和 4 年 5 月 16 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00617

研究課題名(和文) 近世の文芸作品に見られるオノマトペー浄瑠璃・歌舞伎脚本を対象にー

研究課題名(英文) Study of Onomatopoeia in Literary Works of the Edo Period:Focusing the Script of Joruri and Kabuki

研究代表者

中里 理子 (NAKAZATO, Michiko)

佐賀大学・教育学部・教授

研究者番号：90313577

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：江戸時代の浄瑠璃と歌舞伎の脚本を対象にオノマトペを抽出し、演劇脚本に見られるオノマトペの特徴を見出した。浄瑠璃は近松門左衛門の作品とそれ以降の浄瑠璃作品に分けて考察し、近松作品の特徴、近松以降の特徴を明らかにするとともに、浄瑠璃作品全体に中世軍記物語のオノマトペが用いられる傾向を認めた。歌舞伎脚本は上方歌舞伎、江戸歌舞伎の櫻田治助、鶴屋南北、河竹黙阿弥の作品を検討し、それぞれの特徴を明らかにするとともに、ト書きには当時の一般的なオノマトペと動作の指示を表わす定型的なオノマトペが、浄瑠璃部分には中世軍記物語のオノマトペが、会話部分には当時の俗語的な口語が用いられていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

江戸時代のオノマトペ研究は作品ごとに特徴を見る個別研究はあるが、今回のように特定の分野を広く見渡した研究はない。同じ分野の多数の作品からオノマトペを抽出して研究することで、ある作家の特徴を明らかにするだけでなく、前の時代(中世の軍記物語)のオノマトペがどのように継承されているかを見ることができ、さらに特定の分野全体の特徴を見出すことができた。演劇作品においてはオノマトペによって心情や動きの指示、効果音や音楽の指示がなされ、それらが定型的なオノマトペとなっていることが認められた。近世の演劇分野のオノマトペの様相を明らかにし、江戸時代の文芸作品のオノマトペの様相を知る一資料を提示することができた。

研究成果の概要(英文)：I extracted the onomatopoeia in the script of Joruri and Kabuki in the Edo period, and clarified the characteristics of the onomatopoeia of the play script. Regarding Joruri I examined by comparing the works of Chikamatsu Monzaemon and the works of Joruri after Chikamatsu. As a result, the characteristics of Chikamatsu's work were clarified, and it was found that the onomatopoeia used in the medieval Gunki monogatari was often used in all of Joruri's works. Regarding Kabuki works, we studied the works of Kamigata Kabuki, and of Edo Kabuki, that is, the works of Jisuke Sakurada, Nanboku Tsuruya, and Mokuami Kawatake., and clarified their characteristics. According to research, Togaki uses the general onomatopoeia of the time and the standard onomatopoeia that directs actions, the onomatopoeia of the medieval Gunkimonogatari for the Joruri part, and the spoken language of the time for the conversation part.

研究分野：日本語学

キーワード：オノマトペ 江戸時代 浄瑠璃作品 歌舞伎作品 近松門左衛門 鶴屋南北 河竹黙阿弥

1. 研究開始当初の背景

従来のオノマトペ研究は、オノマトペという語群全体の形態面、音韻面、意味面の研究や、個々のオノマトペの意味変化、音韻変化の研究が多く、ある時代のオノマトペの様相、ある分野のオノマトペの様相を捉えた研究はほとんど見られなかった。筆者は中世の軍記物語と説話のオノマトペに関する研究成果があるため、その研究も踏まえて、江戸時代のある一分野のオノマトペの様相を見ることとした。そこで、まず文芸作品の中から浄瑠璃と歌舞伎の脚本という演劇台本を取り上げ、オノマトペの用いられ方を調査・研究し、特徴を明らかにすることにした。現代語に近い近世のオノマトペの様相を明らかにすることで、日本語のオノマトペが歴史的にどのように使用され、どのように現代に受け継がれてきたのかを知る一資料にできると考えた。

2. 研究の目的

近世(江戸時代)の文芸作品に見られるオノマトペの使用状況を明らかにするために、今回は浄瑠璃と歌舞伎の脚本を調査対象として、その特徴を明らかにする。演劇脚本を扱うことで、地の文・ト書きとセリフという二つの側面からオノマトペを調査でき、近世のオノマトペの様相を知る上で有益である。地の文(浄瑠璃部分)とト書きには、動作の指示などをはじめ、当時の一般的なオノマトペの使用例が見られ、会話・セリフに見られるオノマトペには人々の生き生きとした話し言葉に使われたオノマトペの例が見られると考えた。また、従来ほとんど取り上げられなかった「漢語系オノマトペ」も扱い、和語のオノマトペと漢語のオノマトペの関係を明らかにする資料とすることも念頭に置いている。近世のオノマトペの使用実態を明らかにできれば、近世の文学作品におけるオノマトペの意味用法が一般的かどうか、作者独自かどうかを定めることもでき、文学研究に寄与できる。また、日本語のオノマトペに関する歴史的研究に大いに貢献できるものであり、現代語のオノマトペのあり方を考える資料となり得るものである。

3. 研究の方法

(1) 4年間の研究内容の配分

- 近世(江戸時代)の浄瑠璃・歌舞伎脚本の調査に当って、4年間の研究を年次毎に4分類した。
- 初年度：近松門左衛門の浄瑠璃脚本を調査し、近松作品に見られるオノマトペを整理して特徴をまとめる。
 - 2年度：近松以降の浄瑠璃作品(竹田出雲・並木宗輔・近松半二らの作品)を調査し、江戸中期の浄瑠璃・歌舞伎脚本に見られるオノマトペを分類・整理する。
 - 3年度：江戸後期の鶴屋南北の作品を調査し、中期の江戸の歌舞伎脚本に見られるオノマトペを整理して特徴をまとめる。
 - 4年度：江戸末期の河竹黙阿弥の歌舞伎脚本に見られるオノマトペを整理して特徴をまとめる。

(2) 調査の方法

それぞれの脚本を読みながら、作品中のオノマトペをすべて抽出する。次に、抽出したオノマトペを、浄瑠璃部分・ト書き・会話(セリフ)などの部分に分けて、前後の文とともにワード文書に書き写す。さらに、オノマトペだけを浄瑠璃部分・ト書き・会話の部分ごとに五十音順に並べ、オノマトペが描写する語(意味)と、出現数をまとめた表を作成する。それらのデータから、擬音語と擬態語の頻度、オノマトペの語形式や音韻面の特徴、心情表現、人物の動作の描写、動作の指示、音楽や効果音の指示など、特徴が見出せる項目ごとに整理し、作品に見る使用状況をまとめる。さらに、漢語のオノマトペを抽出し、和語系オノマトペとの関連を考察する。

4. 研究成果

(1) 近松門左衛門の浄瑠璃作品に見るオノマトペの特徴

近松の作品を世話浄瑠璃と時代浄瑠璃とに分けて整理し、それぞれの特徴を見出した。

まず、世話浄瑠璃については、14作品からオノマトペを抽出し、動作の表現、感情の表現、語形式、語音の特徴、漢語系オノマトペの観点から特徴を整理した。力強い動作や素早い動きを中心に中世軍記物語のオノマトペが受け継がれている一方で、ひそやかな動きや心情描写に近松作品の定型的表現も見られた。また、一つの語基に対して種々の語形式のオノマトペが見られること、及び語音の一部交替が見られることは、近松作品の特徴であるとともに近世のオノマトペの特徴であり、語形式や音韻面でオノマトペが豊富になることで、前の時代よりも微妙な意味の違いが表せるようになったことがわかる。漢語系オノマトペについてはひらがな表記された語に和語系オノマトペとの密接な関連がうかがわれた。

次に、時代浄瑠璃については、10作品からオノマトペを抽出し、世話物と同様に動作や動きの表現、感情の表現、擬音語の特徴、漢語系オノマトペの観点から特徴を整理し、世話物と比較しながら考察した。動作や動きの表現は世話物以上に軍記物語のオノマトペを継承しているが、軍記に見られなかった語も用いており、人物の描き方が軍記とは異なっている。世話

物とは多用される語に違いがあり、使用語彙の違いが窺われる。感情の表現は世話物と同じく驚きを表す語が多用されているが、世話物より泣き方を表わすオノマトペが少なく、笑いを表すオノマトペが多い。マイナスの感情を表わす語は世話物のほうが多かった。擬音語は世話物より時代物の方が多く、戦闘場面では軍記のオノマトペを継承しつつ、自然音など多くの音が効果音として用いられている。漢語系オノマトペは世話物より多く、人物描写に用いる点、会話文中にも見られる点が特徴的である。

以上のように、近松門左衛門の浄瑠璃作品に見られるオノマトペを世話物と時代物に分けて分析し、近松独特のオノマトペの特徴を、当時のオノマトペの使用状況をまとめることができた。

(2) 近松以降の浄瑠璃作品に見るオノマトペの特徴

近松以降、浄瑠璃全盛期に活躍した竹田出雲・並木千柳(宗輔)・三好松洛らの3作品と浄瑠璃漸衰期に活躍した近松半二らの3作品に見られるオノマトペの特徴を明らかにした。

共通する特徴は、力強い動作や刀に関するオノマトペのほか、素早さ、鋭さ、厳かさ・静かさを表すオノマトペ、笑いを表すオノマトペなど、多くの点で中世軍記物のオノマトペを受け継いでいることである。その他の共通点は6点ある。力強さ、刀に関する語、素早さを表す語に近世らしいオノマトペが見られ、撥音や促音の挿入が多い点、歩く描写が多くオノマトペにより人物像が効果的に描かれている点、[n]音のオノマトペが多く俗語的である点、心理描写に「はつと」が多用され会話を聞いて驚く場面が多い点、笑いのオノマトペは臨場感ある笑い声を用いられるが泣き方のオノマトペは少なく、激しい泣き声「わつと」が多用されている点、二語以上のオノマトペの複合形が見られる点である。竹田出雲らと近松半二らの相違点は、前者の作品には叫び声のオノマトペが効果的に用いられており、後者の作品には「びつくり」が多用され、驚きや動揺を表す語が多用されていることである。

これらの調査により、近松以降に頻繁に使われるようになったオノマトペの特徴と、当時のオノマトペの使用状況を知ることができた。

(3) 上方歌舞伎と江戸歌舞伎の作品に見るオノマトペの特徴

上方歌舞伎の特徴

上方作品の代表者・並木正三の3作品、年代が下った奈河亀輔の2作品、並木五瓶の2作品、計7作品を対象とし、江戸歌舞伎の初代櫻田治助の3作品、鶴屋南北の4作品と適宜比較して特徴を見出した。上方歌舞伎のオノマトペは、ト書き・浄瑠璃部分・セリフで異なる様相を示している。ト書きでは、オノマトペによって動作とそれに伴う心理まで指示している。ト書きでは定型と言えるオノマトペによって役者の動作やその背後にある心情を指示している。江戸歌舞伎にも見られる語もあるが、上方歌舞伎特有のオノマトペ指示が見られ、江戸歌舞伎との語彙の違いが窺われた。鳴物・音楽・効果音についてはオノマトペによる指示が豊富であり、年代が下るとともに種類が増えていく傾向が見られた。浄瑠璃部分には軍記に見られたオノマトペが使われており、近松門左衛門やそれ以降の浄瑠璃作品を経由して、古いオノマトペが残り続けることが見て取れた。セリフには、当時の上方における話し言葉の特徴と思われる俗語的な[N音のオノマトペ]が用いられている。また、強調表現を中心にセリフにしか見られないオノマトペが多数あったが、ト書きに使われないこれらのオノマトペは、俗語的な語として当時流行していた語と思われる。

江戸歌舞伎・櫻田治助の作品に見るオノマトペの特徴

江戸時代後期に活躍した初代櫻田治助の4作品を対象に、ト書き、浄瑠璃部分、セリフに分けてオノマトペを抽出し、ほぼ同時期の上方歌舞伎作品、及び治助の影響が見られる鶴屋南北の作品と比較しながら、オノマトペの特徴を整理した。ト書きには上方作品で多用されていた語が同様に見られたが、「ぎよつと」「ほろり」「もじもじ」「しやんと」等、心情を表す語や戸を閉める音が治助作品に特有であった。「思い入れ」「こなし」「見得」の指示にオノマトペを多く用いるのも治助作品の特徴である。また、効果音・鳴物の「かちかち」「てんつつ」「ごんごん」等の指示も上方作品には見られない特徴である。浄瑠璃部分は、前時代の浄瑠璃作品に用いられたオノマトペの傾向が見られた。セリフのオノマトペは上方より少ないが、「きつと」「つんと」等が特徴的であった。治助作品に見られたオノマトペの特徴の大部分は南北作品にも見られ、関連の深さがうかがわれた。

以上のように、上方歌舞伎の脚本と江戸歌舞伎の脚本の特徴をそれぞれまとめることで、上方及び江戸独自の特徴と、どちらにも共通する江戸期の一般的なオノマトペの様相を捉えることができた。

(4) 鶴屋南北の歌舞伎作品に見るオノマトペの特徴

四世鶴屋南北の歌舞伎作品4作品を対象に、ト書きとセリフに見られるオノマトペの特徴をまとめた。ト書きは音の指示、動きや状況の指示、仕草や動作の指示、感情の指示に分け、セリフは多用されたオノマトペ、俗語のオノマトペに分けて特徴を整理した。鳴り物や拍子木などの音の指示は「てんつつ」「どろどろ」「ばたばた」など名詞化したものが多く見られたほか、ト書きの指示は総じて定型的であり、当時一般的に使われていたオノマトペを用いたと考えられる。ト書きのオノマトペから、『天竺徳兵衛万里入船』が他の3作品(『彩入御伽草』『絵本合法衛』『東海道四谷怪談』)とは傾向が異なり、南北以前の歌舞伎脚本の影響を受けているこ

とが見て取れた。セリフのオノマトペは、ト書きより数も種類も少なく、ト書きとは異なる語が多く見られた。浄瑠璃作品に多く見られた〔N音のオノマトペ〕は少なく、時代による変化及び上方と江戸の違いが見られた。漢語系オノマトペは若干例だがト書きにもセリフにも見られ、一般的に用いられていたと思われる。

当時の代表的歌舞伎作品を対象にオノマトペを見ていくことで、江戸後期の歌舞伎に見るオノマトペの特徴と、当時の一般的なオノマトペの特徴を見出すことができた。

(5) 河竹黙阿弥作品に見るオノマトペの特徴

河竹黙阿弥の幕末の5作品を対象に、ト書き、浄瑠璃、セリフに分けてオノマトペの特徴を整理した。ト書きは、心情表現、動作・表情、音楽や鳴物等の三点から整理した。心情表現は「思入」の指示として、「きつと」「ぎつくり」「じつど」「につたり」「びつくり」「ほつと」「ほろり」などが定型的指示である。その他、心情を表わす「むつと」「はつと」「うつとり」等が多用されている。動きや表情は、「きつと見得」を初め「つかつか」「どうと」「ばつたり」「ぐつと」「しやんと」等が多用されており、南北作品や江戸歌舞伎との共通点、相違点明らかになった。音楽は「きつぱり」「しんみり」「しつぱり」という三味線の指示が特徴的である。浄瑠璃部分は軍記や浄瑠璃に見られた古い時代のオノマトペが多い一方、口語的なオノマトペも見られた。セリフにはト書きや浄瑠璃に見られないオノマトペが多数ある。「きなきな」「すごすご」等の心情表現、「しやあしやあ」「ぐびぐび」等の卑俗なイメージの語、「ぐつすり」「すやすや」等の眠りを表す語、「きりきり」「さつぱり」等の強調表現が特徴的である。また、セリフに「べんべん」という漢語系オノマトペも見られた。以上のように、黙阿弥作品独特のオノマトペと当時の一般的なオノマトペの様相を見ることができた。

(6) 漢語系オノマトペと和語系オノマトペ

浄瑠璃作品、歌舞伎作品、それぞれに漢語系オノマトペが用いられていた。特に「ゆうゆうと」のように人物描写に用いるオノマトペが多く見られた。漢語系オノマトペについては、引き続き、江戸時代の他分野の文芸作品での使用状況と併せて考察する必要がある。今回の調査結果を今後の研究に活かしていきたい。

以上のように、当初立てた研究計画は予定通りに進み、江戸時代の浄瑠璃・歌舞伎作品に見るオノマトペの特徴を見出し、使用状況をまとめるという目的を果たすことができた。ある時代、ある特定の分野のオノマトペについて調査した研究はこれまでに見られなかった。今回の科研の調査で、江戸時代の文芸作品に見られるオノマトペのうち、浄瑠璃・歌舞伎作品のオノマトペの特徴を明らかにできたことは、オノマトペの歴史的研究における大きな成果である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 中里理子	4. 巻 114
2. 論文標題 近世上方歌舞伎に見られるオノマトペの特徴 江戸歌舞伎との比較を交えて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 表現研究	6. 最初と最後の頁 58-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中里 理子	4. 巻 6
2. 論文標題 河竹黙阿弥作品のオノマトペ：幕末の歌舞伎脚本を対象に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 佐賀大学教育学部研究論文集	6. 最初と最後の頁 29～42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34551/00023146	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中里理子	4. 巻 6-1
2. 論文標題 櫻田治助の作品に見られるオノマトペの特徴：上方歌舞伎及び鶴屋南北との比較を交えて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佐賀大学教育学部研究論文集	6. 最初と最後の頁 73-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34551/00023077	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中里理子	4. 巻 5-1
2. 論文標題 鶴屋南北の歌舞伎作品に見られるオノマトペの特徴	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 佐賀大学教育学部研究論文集	6. 最初と最後の頁 81-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34551/00022877	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中里理子	4. 巻 第4集第1号
2. 論文標題 近松門左衛門の時代浄瑠璃に見られるオノマトペの特徴 世話浄瑠璃との比較を交えて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 佐賀大学教育学部研究論文集	6. 最初と最後の頁 117-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中里理子	4. 巻 4号
2. 論文標題 浄瑠璃作品に見られる漢語系オノマトペ 和語と漢語の関わりから	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 佐賀大外国語教育	6. 最初と最後の頁 26-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中里理子	4. 巻 8号
2. 論文標題 近松以後の浄瑠璃作品に見られるオノマトペ 竹田出雲、近松半二を中心に -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 佐賀大学全学教養機構紀要	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中里理子	4. 巻 3-1
2. 論文標題 近松門左衛門の世話浄瑠璃に見られるオノマトペの特徴	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 佐賀大学教育学部研究論文集	6. 最初と最後の頁 81-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------